

重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み(担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画の実施状況	総合評価	所見	次年度への課題 今後の改善方針
1 生徒指導の推進	①他人を思いやる優しさや豊かな人間性の育成に努める。	①生徒との面談を実施し、生徒理解を深める。 (生徒指導)	面談が生徒理解・生徒指導に有効であったとする担任が80%以上であった。 面談が生徒理解・生徒指導に有効であったとする担任が70%以上であった。 面談が生徒理解・生徒指導に有効であったとする担任が50%以上であった。 面談が生徒理解・生徒指導に有効であったとする担任が50%未満であった。	A	生徒との面談を実施し、生徒理解を深める時間を設けたが、あまり有効ではなかった。(92.9%)	A	各学期始めに面談週間を実施したが、生徒理解を深める時間となった。正担任のみでのアンケート結果です。	面接内容や時間の工夫が必要と考えられる。正担任のみアンケートで14人中14名回答。今年度同様に、必ずいじめ防止啓発を意識して実施したい。
		②教育相談・特別支援教育の研修や専門的知識の情報発信を実施する。 (生徒指導)	年間3回以上実施する。 年間2回以上実施する。 年間1回以上実施する。 実施できなかった。	A	教育相談・特別支援教育の研修を実施した成果は十分達成できた。(89.4%)		教育相談・特別支援教育の研修に対する教職員の必要性を感じた。	教職員のニーズを把握し、継続しての研修が好ましく感じた。
	②社会のルールやマナー、校則を厳守させ、規範意識の向上を図る。	①定期的に服装・頭髪検査を実施する。 (生徒指導)	違反者数が0になった。 全体で違反者数が10人未満になった。 違反者数が前年度とほぼ同数であった。 違反者数が前年度より増加した。	B	定期的に服装・頭髪検査を実施したが、違反者は前年度とほぼ同数に近かった。	A	定期的に服装・頭髪検査を実施する事には意味がある。毎日、通学指導(挨拶・身だしなみ・通学マナー)を行い、遅刻者数の減少を目指す事は基本的な生活習慣の確立させる為に必要不可欠である。学校の生徒指導の方針を明確に示し、教職員の共通理解を図ることにより、生徒や保護者への説明が可能となる。登校時の交通マナーの向上と、自転車マナーの順守を図ることにより、交通事故防止に繋がる。保護者との連携を担任中心に努めた。長期休業中に校外巡視を実施することで、生徒実態が把握できる。補導センター・警察に学期ごとに訪問し、情報交換に努めることの重要性を認識することができた。	教職員が積極的に生徒指導に努めることが出来たが、2学期からだった。PTA・生活安全委で協力し、計画通りに実施することが困難な時もあった。
		②毎日、通学指導(挨拶・身だしなみ・通学マナー)を行い遅刻者数の減少を目指す。 (生徒指導)	遅刻者数が全校生の前年度の遅刻者数より10%以上減少した。 遅刻者数が全校生の前年度の遅刻者数を下回った。 遅刻者数が全校生の前年度の遅刻者数を上回った。 遅刻者数が全校生の前年度の遅刻者数より10%以上増加した。	A	毎日、通学指導(挨拶・身だしなみ・通学マナー)を行い、遅刻者数の減少を目指した結果、前年度の遅刻者数を下回った。			
		③学校の生徒指導の方針を明確に示し、教職員の共通理解を図る。 (生徒指導)	教職員の指導目標に対する達成度が90%以上であった。 教職員の指導目標に対する達成度が80%以上であった。 教職員の指導目標に対する達成度が50%以上であった。 教職員の指導目標に対する達成度が30%以上であった。	B	学校の生徒指導の方針を明確に示し、教職員の共通理解を図った結果、達成度が90%以上であった。(86.9%)			
		④登校時の交通マナーの向上と、自転車マナーの順守を図る。 (生徒指導)	定期的に生活委員が駐輪マナーを呼びかけ、大きく効果を上げた。 定期的に生活委員が駐輪マナーを呼びかけ、効果を上げた。 不定期ではあるが生活委員が駐輪マナーを呼びかけ、効果を上げた。 不定期の実施となり、効果が上がらなかった。	A	登校時の交通マナーの向上と、自転車マナーの順守を図った結果、効果を上げた。			
		⑤教職員・PTA・生活安全委員で協力し、交通安全の啓発のための安全指導・交通マナーアップキャンペーンを行う。 (生徒指導)	教職員・PTA・生活安全委員で協力し、計画通りに実施することができた。 定期的に実施することができた。 不定期ではあるが、実施することができた。 実施することができなかった。	A	教職員・PTA・生活安全委員で協力し、交通安全の啓発のための安全指導・交通マナーアップキャンペーンを行う事ができた。			
		⑥長期休業中に校外巡視を実施する。 (生徒指導)	年3回以上実施し、問題行動等未然防止に成果をあげた。 年2回実施した。 年1回実施した。 全く実施できなかった。	A	長期休業中に校外巡視を年3回(夏休み・冬休み)実施した。			
		⑦補導センター・警察に学期ごとに訪問し、情報交換に努める。 (生徒指導)	十分意見交換ができ、生徒指導に活かすことができた。 毎月訪問をし、十分な意見交換ができた。 毎月訪問したが、十分な意見交換ができなかった。 毎月訪問できなかった。	A	補導センター・警察に学期ごとに訪問し、情報交換に努めた結果、十分に意見交換ができ、生徒指導に活かすことができた。			
	③生徒理解を深め、個に応じた生徒指導に努める。	①問題行動等を起こした生徒や、良好な学校生活のできていない生徒の保護者に対する面談を実施する。 (生徒指導)	保護者と共通理解を図り、生徒に対する支援に成果を上げた。 保護者との共通理解は図れたが、生徒に対する支援の成果は不十分であった。 保護者との共通理解は図れたが、生徒に対する支援の成果を上げられなかった。 保護者との共通理解を図ることができなかった。	A	問題行動等を起こした生徒や、良好な学校生活のできていない生徒の保護者に対する面談を実施する事ができた。	A	いじめ防止等のためにアンケートを実施して、事前に認知啓発指導できた場合と認知後指導が難しい場合もあった。	人間関係のトラブルから体調不良や基本的な生活習慣を乱してしまう生徒も見受けられた。
②いじめ防止等のためにアンケートを実施する。 (生徒指導)		年2回以上実施し、いじめ等を未然防止に成果をあげた。 年2回実施した。 年1回実施した。 全く実施できなかった。	A	いじめ防止等のためにアンケートを年2回以上実施した。				

重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み(担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画の実施状況	総合評価	所見	次年度への課題 今後の改善方針
2 環境教育・安全 教育の推進	①生命を尊重し、心身の健康と、安全・感染症予防・防災意識の高揚をはかり、自他の安全を守る能力を育成する。	①心肺蘇生・AED訓練を実施し、応急手当の知識や技術の習得を図る。(保健環境)	心肺蘇生・AED訓練に参加し、知識と技術を習得することができた教職員が80%以上であった。 心肺蘇生・AED訓練に参加し、知識と技術を習得することができた教職員が70%以上であった。 心肺蘇生・AED訓練に参加し、知識と技術を習得することができた教職員が50%以上であった。 心肺蘇生・AED訓練に参加し、知識と技術を習得することができた教職員が50%未満であった。	A	97%の教員がAEDについての知識と技術を習得できたと答えた。	B	生徒は教室の近くにあるAEDの設置場所は知っているが、学校全体にあるすべての設置場所を知っている生徒は多くない。設置場所は知っているが、使用方法を理解している生徒も多くないので、研修等を行う必要がある。	AEDの設置場所周知に関する工夫が必要である。教室掲示や集会などで生徒への周知を図る。
		②健康について関心を持たせ、疾病異常の早期発見のため、健康診断の受診や事後措置の徹底を図る。(保健環境)	健康診断受診率が100%であった。 健康診断受診率が95%以上であった。 健康診断受診率が90%以上であった。 健康診断受診率が90%未満であった。	A	100%の教員が健康診断を受診した。			
		③生活習慣に関する調査を実施し、活用する。(保健環境)	調査結果が生徒理解・生徒指導に役立ったとする担任が80%以上であった。 調査結果が生徒理解・生徒指導に役立ったとする担任が70%以上であった。 調査結果が生徒理解・生徒指導に役立ったとする担任が50%以上であった。 調査結果が生徒理解・生徒指導に役立ったとする担任が50%未満であった。	B	70%以上の担任が役立ったと答えた。			
		④保健日よりやホームルームでの啓発等あらゆる機会を捉えてAEDの設置場所について周知を図る。(保健環境)	AEDの設置場所・使用方法を知っている生徒が80%以上であった。 AEDの設置場所・使用方法を知っている生徒が70%以上であった。 AEDの設置場所・使用方法を知っている生徒が50%以上であった。 AEDの設置場所・使用方法を知っている生徒が50%未満であった。	B	74%の生徒が設置場所を知っている。			
	②校内美化に努め、情操豊かな学校環境づくりに努める。	①毎日の清掃や大掃除を積極的に行わせ、学習環境を自ら整えさせる。(保健環境)	意欲的に清掃に取り組んだ生徒が80%以上であった。 意欲的に清掃に取り組んだ生徒が70%以上であった。 意欲的に清掃に取り組んだ生徒が60%以上であった。 意欲的に清掃に取り組んだ生徒が60%未満であった。	A	90%以上の生徒が意欲的に清掃に取り組んだ。	A	積極的に清掃に参加している生徒が多い反面、非協力的な生徒も少なからず存在している。	環境整備の必要性を理解させるために、教室掲示や集会が必要である。
		②ホームルームにおいてゴミの分別(新学校版環境ISO)に対する意識の高揚を図る。(保健環境)	ゴミの分別ができている生徒が90%以上であった。 ゴミの分別ができている生徒が80%以上であった。 ゴミの分別ができている生徒が70%以上であった。 ゴミの分別ができている生徒が70%未満であった。	A	90%以上の生徒がゴミの分別ができていると答えた。			
		③ゴミ処理の意識の高揚を図る。(保健環境)	校内でゴミのポイ捨てが無く、ゴミ箱に捨てられ、余計なゴミの持込も無い。 校内でゴミのポイ捨てが少なく、ゴミ箱に捨てられ、余計なゴミの持込も少ない。 校内でゴミのポイ捨てがあり、余計なゴミの持込もやや多い。 校内でゴミのポイ捨てが多く、余計なゴミの持込も多い。	A	90%以上の生徒が校内がきれいだと答えた。			
	③防災・減災教育を推進し、地域防災の即戦力および将来の担い手を育成する。	①防災訓練を実施し、防災拠点としての役割を正しく認識している。(保健環境)	全教職員の80%以上が防災体制が確立していると感じている。 全教職員の70%以上が防災体制が確立していると感じている。 全教職員の60%以上が防災体制が確立していると感じている。 防災体制が確立していると感じている教職員が60%未満であった。	A	97%以上の教員が防災体制が確立していると感じたと答えた。	A	防災教育を通し、生徒の防災意識は向上している。しかし、防災意識の向上が見られない生徒もいる。	職員研修や避難訓練の改善を行い、生徒と職員がともに参加する形に改善する必要がある。
		②防災教育や防災計画を通して、防災準備(避難グッズや経路の確認)率を高める。(保健環境)	防災準備が整った生徒が80%以上であった。 防災準備が整った生徒が70%以上であった。 防災準備が整った生徒が60%以上であった。 防災準備が整った生徒が60%未満であった。	A	92%の生徒が防災意識が高まったと答えた。			

重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み(担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画の実施状況	総合評価	所見	次年度への課題 今後の改善方針
3 特別活動の推進	①ホームルーム活動・生徒会活動や学校行事を活性化させ、自主性や実践的な態度を育成する。	①生徒会を中心としたあいさつ運動や清掃奉仕活動等が毎月計画的に企画・運営され、多くの生徒が活動に参加するように支援する。(特別活動)	生徒会や専門委員会が中心となり企画運営ができ、毎月実施した。生徒会や専門委員会の一部の生徒で実施した。実施はしたが、不定期であった。実施しなかった。	A	あいさつ運動においては計画に沿って毎月実施し、生徒会が積極的に運営することができた。	A	あいさつの励行や清掃奉仕活動などでは部活動の生徒が積極的に取り組んでいた。また競技力、実績共に向上した部が多く、学校の活性化に繋がった。学校行事においては、95.6%の生徒が「楽しく参加できた」または「達成感が得られた」と感じており、更に生徒が意欲的に活動できる環境を整えたい。	各専門委員会の活動の活性化を図るため、役員の選定方法などを見直す必要がある。
		②生徒会を中心とした生徒主体の球技大会・学校祭が企画・運営されるように支援する。(特別活動)	生徒会が中心となり、自発的に企画運営でき、各行事が円滑に行われた。生徒会が中心となり、各行事を実施できた。生徒会が中心となり企画したがあまり協力を得られず運営が円滑ではなかった。生徒会や専門委員会が機能しなかった。	A	学校行事の一部に関しては生徒会が自発的に企画を提案し、運営する場面も見受けられた。計画・運営においては教員始動ではあるが、生徒会が中心となって実施した。			
		③学校行事において、個人の個性を活かせ、積極的にできるように支援する。(特別活動)	一人一人の個性が十分に発揮された。一人一人の個性がおおむね発揮された。一部の生徒のみの活動であった。生徒の個性が発揮されず、活気が感じられなかった。	B	クラスや各種委員会での役割を分担したり、文化的・体育的な活動の場を増やすことで、生徒一人一人の個性が発揮されていた。			
		④専門委員会活動の活性化を図るため、各専門委員会の役割を明確にし責任を果たせるように支援する。(特別活動)	70%以上の生徒が役割を自覚し、その責任を果たせた。60%以上の生徒が役割を自覚し、その責任はおおむね果たせた。役割は自覚していたが、あまりその責任を果たすことができなかった。役割の自覚が十分でなく、その責任を果たせなかった。	A	役割を自覚し、その責任をおおむね果たせた生徒が81.2%であった。			
	②部活動を推進し、スポーツ活動において質の高い専門教育を行い、競技力の向上とトップアスリートの育成を図るとともに、競技スポーツの発展に寄与する人材を育成する。	①部活動の意義について理解し、計画的に実施し生徒の自主的・自発的活動を支援する。(特別活動)	部活動の年間計画に沿って活動ができ、その目標を達成することができた。年間計画に沿った活動がほぼできたが、目標の達成には及ばなかった。年間計画通りの活動があまりできず、目標の見直しの必要性を感じた。年間計画に沿った活動ができず、各部の方針や目標を達成することができなかった。	A	65.8%の部活動が年間計画に沿って活動ができ、その目標を達成することができたと答えている。	A		部活動の登録者数は8割を超えるが、活動をしていない生徒も多く、登録方法や意欲の低い生徒の指導について検討していきたい。
		②部活動を推進するため、関係機関との連携や、指導方法について工夫し、専門性を高め競技力の向上を図る。(特別活動)	昨年度実績より競技力が向上した。昨年度実績とほぼ同等の競技力であった。昨年度実績よりやや競技力が低下した。昨年度実績より大幅に競技力が低下した。	B	「昨年度よりも競技力が向上した」、あるいは「昨年度と同等の競技力であった」と体育顧問57.9%の指導者が答えている。			
	③ボランティア活動を積極的に行い、地域への愛着と誇りを育み持続可能な社会の担い手を育成する。	自分自身の生活する学校や地域社会において起こる課題の解決に対して、自分自身が自発的・主体的にその問題を解決していこうとする。(特別活動)	ボランティア活動の意義を理解し、主体的・積極的に参加し、継続できた。ボランティア活動の意義を理解し、主体的・積極的に参加した。積極的ではなかったが、周りがやっていたので活動には参加した。ボランティア活動は何もしなかった。	B	学校の内外でのボランティア活動について広報するとともに、生徒の活動を盛り上げた。ボランティア活動の意義を理解し、主体的・積極的に参加した生徒が32.9%であった。授業では講演会を通して地域社会への親しみや世界の文化の理解を進めた。また、インターアクト部は校内草抜き、学校周辺～撫養駅まで清掃活動、県高校青少年赤十字協議会秋季学習会参加、赤い羽根共同募金活動等積極的に行うことができた。	B	積極的に地域に対し、ボランティアをしようとする生徒がいると同時に生徒に対するアンケートでは「あまり興味がなく参加しなかった」という関心のない生徒が39.6%と多かった。	自分自身の所属する学校や地域社会に対して愛着を持ち、問題解決をしていこうという態度を生徒に持たせるために、学校行事、生徒総会、清掃活動などを充実させていく。
	④生涯スポーツを通して地域社会で活躍できる人材を育成する。	多様な志向及び体力や技能の違いの中でスポーツを継続的に楽しむことができる技能にとどまらずスポーツに関する運営やスポーツの振興に貢献するための技能を身につけさせる。	スポーツの推進及び発展に寄与する自己の姿勢や他者、地域社会との関わり方などスポーツの価値を高めることに意欲的に取り組んだ。スポーツの推進及び発展に寄与する自己の姿勢や他者、地域社会との関わり方などスポーツの価値を高めることに取り組んだ。スポーツの推進及び発展に寄与する自己の姿勢や他者、地域社会との関わり方などスポーツの価値を高めることに取り組めなかった。事業を実施できなかった。	C	地域と連携したスポーツ活動等は実施できなかった。	C	今後、鳴門市や鳴門教育大学等と連携し、協議をしていきたい。	学校・地域・大学等の連携を深め生涯スポーツを通じた人材育成について検討していく必要がある。

重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み(担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画の実施状況	総合評価	所見	次年度への課題 今後の改善方針
4 学習指導の充実	①基礎的・基本的な事項の指導を徹底し、基礎学力の向上定着を図る。	①生徒が理解しやすいように配慮した授業をする。(教務)	生徒の85%以上が授業が分かると感じている。 生徒の75%以上が授業が分かると感じている。 生徒の65%以上が授業が分かると感じている。 生徒の65%未満が授業が分かると感じている。	A	ほとんど理解できているが38.8%、半分ぐらいは理解できている55.2%で94.0%の生徒は理解できている。	A	日常的なClassiやタブレットといったICT活用が定着してきている。今後もアクティブラーニングの推進が必要である。	研修等を通じて、電子黒板やタブレット等のICT活用を一層推進し、効果的な学習指導や表現力の育成に努める。(授業理解)
		②定期考査に向けて学習計画を立てて考査に臨ませる。(進路指導)	学習計画を立てて、考査の勉強も十分できた生徒の割合が50%以上であった。学習計画を立てなかったが、考査の勉強は十分できた生徒の割合が50%以上であった。学習計画を立てて、考査の勉強も十分できた生徒の割合が50%未満であった。学習計画を立てなかったが、考査の勉強は十分できた生徒の割合が50%未満であった。	C	学習計画を立て、考査の勉強も十分できたが22%、学習計画を立てたが考査の勉強は十分できなかったが35%で合わせて57%の者が考査に向けて学習計画を立てている。		学習計画を実行しやすくするために自由学習帳を作成し、計画と達成度合いが同時に確認できるようにする。	
		③始業チャイムを生徒とともに聞く。(教務)	毎授業チャイムを教室で聞いた教員が80%以上であった。 毎授業チャイムを教室で聞いた教員が70%以上であった。 毎授業チャイムを教室で聞いた教員が60%以上であった。 毎授業チャイムを教室で聞いた教員が60%未満であった。	A	「毎回聞いている」と「ほとんど聞いている」をあわせて、100.0%の教員が始業のチャイムを生徒とともに聞いている。		使用教室の配置等を考慮し、スムーズな授業開始につなげることができている。	
		④各教科において、資格や検定受検を積極的に薦め、指導・支援する。(進路指導)	検定の基本級合格率が55%以上であった。 検定の基本級合格率が50%以上であった。 検定の基本級合格率が50%未満であったが、受験者数が増加した。 検定の基本級合格率が50%未満で、受験者数も減少した。	A	基本級合格率が61.0%であった。		次年度も引き続き、基本級合格率を維持できるようにしたい。	
	②専門性の高い科目を含めた幅広い選択科目等を設定し、生徒一人ひとりの興味・関心・進路に応じた履修指導を推進する。	①個別の相談体制を充実させ、個々の生徒に応じた時間割の作成に努める。(教務)	生徒の90%以上が十分な相談体制のもと時間割を作成できたと感じている。 生徒の80%以上が十分な相談体制のもと時間割を作成できたと感じている。 生徒の70%以上が十分な相談体制のもと時間割を作成できたと感じている。 生徒の70%未満が十分な相談体制のもと時間割を作成できたと感じている。	A	94.2%の生徒が十分な相談体制で時間割を作成できたと感じている。	A	履修検討会議で個々の生徒について丁寧に検討している取り組みを継続するとともに、進路指導課とも協力し、希望する進路に向けた履修となるよう今後も取り組みたい。	履修検討会議で個々の生徒について丁寧に検討している取り組みを継続するとともに、進路指導課とも協力し、希望する進路に向けた履修となるよう今後も取り組みたい。
		②生徒の個性・進路に合った科目選択をさせる。(教務)	生徒の時間割満足度が90%以上であった。 生徒の時間割満足度が80%以上であった。 生徒の時間割満足度が70%以上であった。 生徒の時間割満足度が70%未満であった。	A	90.4%の生徒が科目選択に満足している。			
	③生徒の学習意欲を引き出す指導体制・指導方法の工夫改善を図る。	①学習週間・面接週間を設け、学習の習慣化を図り、面接を効果的に利用する。(教務)	生徒の90%以上が学習週間・面接週間の取組が良かったと感じている。 生徒の80%以上が学習週間・面接週間の取組が良かったと感じている。 生徒の70%以上が学習週間・面接週間の取組が良かったと感じている。 生徒の70%未満が学習週間・面接週間の取組が良かったと感じている。	A	90.3%の生徒が、面接により定期考査を振り返ることができ、面接週間の取組が良かったと感じている。	A	具体的なテーマの設定等、面接週間について、各年次や進路指導課、生徒指導課と協調していく必要がある。	課題解決に必要な思考力・判断力・表現力等をはぐむために「主体的・対話的で深い学び」の視点から、ICTを効果的に活用し、授業改善に取り組む必要がある。
		②全員が学力向上に向けて個人目標を設定し、取り組みを推進する。(教頭)	育成評価システムにおける学習指導の評価B以上が全教員の90%以上であった。 育成評価システムにおける学習指導の評価B以上が全教員の80%以上であった。 育成評価システムにおける学習指導の評価B以上が全教員の70%以上であった。 育成評価システムにおける学習指導の評価B以上が全教員の70%未満であった。	A	99.3%の項目でB以上の評価を付けている。			
		③教員相互間の授業見学および研究授業を実施し、指導方法向上を目指す。(学力向上)	教員の全員が指導方法向上に向けた取り組みを行った。 教員の90%以上が指導方法向上に向けた取り組みを行った。 教員の80%以上が指導方法向上に向けた取り組みを行った。 教員の80%未満が指導方法向上に向けた取り組みを行えなかった。	B	97.4%の教員が相互授業参観や研究授業に参加し、指導力向上に向けて取り組んだ。			

【令和7年度 徳島県立鳴門渦潮高等学校 学力向上実行プラン】

重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み(担当科)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画の実施状況	総合評価	所見
4 学習指導の充実	①基礎的・基本的な指導を徹底することで基礎学力の向上を図る。	日々の渦高タイムと確認テスト後の補習や再テストの実施を確実にし、基礎学力の向上と定着につなげる。(1年次)	日々の渦高タイムと確認テスト後の補習や再テストが100%実施できた。 日々の渦高タイムと確認テスト後の補習や再テストの実施が80%以上100%未満であった。 日々の渦高タイムと確認テスト後の補習や再テストの実施が70%以上80%未満であった。 日々の渦高タイムと確認テスト後の補習や再テストの実施が70%未満であった。	A	確認テストや再テストを最後までやりきることができた。	A	確認テストや再テストに対して、年次団すべての先生方で取り組めた。必要に応じて個別の補習を実施した。
		正副担任で日々の渦高タイムの指導を行い確認テスト後の補習や再テストを実施し、基礎学力の向上と定着につなげるよう徹底する。(2年次)	日々の渦高タイムと確認テスト後の補習や再テストが100%実施できた。 日々の渦高タイムと確認テスト後の補習や再テストの実施が80%以上100%未満であった。 日々の渦高タイムと確認テスト後の補習や再テストの実施が70%以上80%未満であった。 日々の渦高タイムと確認テスト後の補習や再テストの実施が70%未満であった。	A	確認テストや再テストを最後までやりきることができた。		確認テストや再テストに対して、年次団すべての先生方で取り組み、成果を上げた。
		正副担任で日々の渦高タイムの指導を行い確認テスト後の補習や再テストを実施し(1学期)、基礎学力の向上と定着につなげるよう徹底する。(3年次)	日々の渦高タイムと確認テスト後の補習や再テストが100%実施できた。 日々の渦高タイムと確認テスト後の補習や再テストの実施が80%以上100%未満であった。 日々の渦高タイムと確認テスト後の補習や再テストの実施が70%以上80%未満であった。 日々の渦高タイムと確認テスト後の補習や再テストの実施が70%未満であった。	A	確認テストや再テストを最後までやりきることができた。		確認テストや再テストに対して、年次団すべての先生方で取り組み、成果を上げた。
		社会で役立つ基礎的言語能力の定着を図るための課題(週末課題、授業の課題プリント)として、提出率90%以上を目指す。(国語科)	課題提出率が90%以上であった。 課題提出率が80%以上であった。 課題提出率が80%未満であった。 課題提出率が70%未満であった。□	A	週末課題・授業の課題ともに提出90%いじょうをたっせいすることができた。		提出物の指導は基礎学力の向上・定着につながると思われる。引き続き徹底したい。
		基礎的・基本的な事項を確認させるため授業の課題プリントの提出率が90%以上を目指す。(数学科)	課題の提出率が90%以上であった。 課題の提出率が70%以上90%未満であった。 課題の提出率が50%以上70%未満であった。 課題の提出率が50%未満であった。	A	長期休業中の課題・授業の課題ともに提出90%以上を達成することができた。		提出物の指導は基礎学力の向上・定着に繋がると思われる。引き続きチェックを徹底したい。
		授業ノートの提出率および「進路実現のための勉強をしている」と実感できている生徒を増やす。(地歴公民科)	授業ノートの提出率および進路実現に役立つと実感できる生徒が90%以上であった。 授業ノートの提出率および進路実現に役立つと実感できる生徒が80%以上であった。 授業ノートの提出率および進路実現に役立つと実感できる生徒が70%以上であった。 授業ノートの提出率および進路実現に役立つと実感できる生徒が70%未満であった。	A	授業ノート・課題とあわせ提出90%以上を達成することができた。		さまざまなICT教材を適材適所で生徒の理解を深めるために使用する。また、教員独自の教材をさらに開発する。
		科学的な思考力・判断力の育成のために、授業プリントや実験レポートの提出率を上げ、「内容が理解できている」と実感できている生徒を増やす。(理科)	課題の提出率および内容を理解できたと感じている生徒が90%以上であった。 課題の提出率および内容を理解できたと感じている生徒が80%以上であった。 課題の提出率および内容を理解できたと感じている生徒が70%以上であった。 課題の提出率および内容を理解できたと感じている生徒が70%未満であった。	A	授業プリントおよび課題の提出率90%を達成することができた。		提出が遅れがちな生徒も一部みられたが、大部分は期限内に提出をすることができた。
		英語を用いて意思疎通が図れるよう、基礎学力を定着させるために、授業の課題プリント等、課された提出物の提出率100%を目指す。(英語科)	課題の提出率が100%を達成した。 課題の提出率が90%以上であった。 課題の提出率が80%以上であった。 課題の提出率が80%未満であった。	B	週末課題・長期休業中の課題ともに提出90%以上を達成することができた。		提出物をこつこつできる力が基礎学力の向上につながり、学習意欲の向上にもつながっている。
		ICT機器の活用やグループでの意見交換、発表などを充実させ、毎時間の目標を明確にし、積極的に学習活動ができる態度を養う。(保健体育科)	生徒の80%が授業が楽しく、目標達成に向け前向きに取り組めたと感じている。 生徒の70%が授業が楽しく、目標達成に向け前向きに取り組めたと感じている。 生徒の60%が授業が楽しく、目標達成に向け前向きに取り組めたと感じている。 生徒の50%が授業が楽しく、目標達成に向け前向きに取り組めたと感じている。	A	怪我、体調不良の生徒を除き、80%以上の生徒が積極的に授業に取り組めた。		映像等を今以上に活用することで、技術や知識の理解を促進し、授業への積極的な参加を促したい。
		ビジネスにおけるコンプライアンスの意識や商業習慣・スキルを身につけるために課題提出率の向上を目指す。(商業科)	課題の提出率が90%以上であった。 課題の提出率が70%以上90%未満であった。 課題の提出率が50%以上70%未満であった。 課題の提出率が50%未満であった。	A	卒業後を意識した指導に努め、提出率は94%であった。		検定用ワークブックに限らず、配布物やノートの提出についてもおおむね良好であった。
		計画的に処理する能力を身につけるために実習後の報告書を正確で期限内の提出率を目指す。(工業科)	報告書の提出率が100%であった。 報告書の提出率が80%以上であった。 報告書の提出率が60%以上であった。 報告書の提出率が60%未満であった。	A	提出率は100%で指導に成果があった。		24%の生徒が、「期限内」に出せたと回答しているので、指導の成果は目標以上であったと思われる。
		生活に必要な基礎的な知識・技術の定着を図るため、提出物の提出率90%以上を目指す。(家庭科)	課題の提出率が90%以上であった。 課題の提出率が70%以上90%未満であった。 課題の提出率が50%以上70%未満であった。 課題の提出率が50%未満であった。	A	提出率は96.1%で指導に成果があった。		生徒は一部提出が遅れることがあったが、遅れても提出しようとする態度が見られた。
		社会福祉・介護福祉検定合格に向け知識の定着を図るため、授業の課題プリント提出率90%以上を目指す。(福祉・看護科)	課題の提出率が90%以上であった。 課題の提出率が70%以上90%未満であった。 課題の提出率が50%以上70%未満であった。 課題の提出率が50%未満であった。	B	提出率は70.0%であった。		課題プリントを紛失する生徒がいたが、大部分は期限を守り提出することができた。
		情報活用に必要な基礎的な知識・技術の定着を図るために授業提出物の提出率90%以上を目指す。(情報科)	提出率が90%以上であった。 提出率が70%以上であった。 提出率が50%以上であった。 提出率が50%未満であった。	A	提出率はほぼ90%であった。		概ねほとんどの生徒が課題を提出できており、真面目に課題に取り組んでいる。
学習した表現力や鑑賞力を活かして制作した作品や、学習内容を記録したプリント等を確実に提出させる。(芸術科)	課題の提出率が100%以上であった。 課題の提出率が80%以上であった。 課題の提出率が60%以上であった。 課題の提出率が60%未満であった。	B	欠席や作業の遅延で提出できていない課題やプリントが多少あったので、90%前後の提出率であった。	生徒の取り組みはよく、時間いっぱい制作・練習する様子が見られ、積極的に参加していることがわかる。			

【令和7年度 徳島県立鳴門渦潮高等学校 学力向上実行プラン】

重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み (担当科)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画の実施状況	総合評価	所見
4 学習指導の充実	②専門性の高い科目を含めた幅広い選択科目等を設定し、生徒一人ひとりの興味・関心・進路に応じた履修指導を推進する。	日本漢字能力検定3級の合格率を上げる。(国語)	3級受検者のうち、合格者が30%以上であった。 3級受検者のうち、合格者が20%以上であった。 3級受検者のうち、合格者が10%以上であった。 3級受検者のうち、合格者が昨年度より減少した。	A	3級合格者が2回の検定終了時点で23名で、37%を達成することができた。	B	授業での取り組みが成果として出て、生徒の意欲が高まった。
		実用英語技能検定3級受検者の合格率を上げる。(英語科)	3級受検者のうち、合格者が60%以上であった。 3級受検者のうち、合格者が50%以上であった。 3級受検者のうち、合格者が40%以上であった。 3級受検者のうち、合格者が40%未満となった。	C	3級合格率は40%であった。		2次試験の合格率は100%なので筆記試験対策を早めに行いたい。
		進路選択の幅を広げるために資格取得に努める。(商業科)	全商検定3級の合格率が60%以上であった。 全商検定3級の合格率が40%以上であった。 全商検定3級の合格率が30%以上であった。 全商検定3級の合格率が前年度より低下した。	A	各種目の合格率は64.8%であった。		3級種目は各科目の基礎・基本となるものである。合格することで、継続した学習へのモチベーションにつなげるとともにCBTへの対応も図りたい。
		進路選択の幅を広げるためICTの活用により、工業系の免許取得率を上げる。ただし検定は除く。(工業科)	免許取得率の平均が40%以上であった。 免許取得率の平均が30%以上であった。 免許取得率の平均が20%以上であった。 免許取得率の平均が20%未満であった。	A	取得率は64.9%であった。 対象免許は第二種電気工事士、危険物取扱者乙4類、ボイラー取扱技能講習修了者、ガス溶接技能講習修了者である。		問題文の理解力や計算力の低下が感じられる。また技能試験における手先の不器用さや段取りの仕方にも甘さが見受けられる。今後指導する時の、重点ポイントだと考えられる。
		家庭科技術検定の技術指導においてICTを活用し指導することにより、食物・被服・保育分野において合格率80%以上を目指す。(家庭科)	検定の合格率が90%以上であった。 検定の合格率が80%以上90%未満であった。 検定の合格率が70%以上80%未満であった。 検定の合格率が70%以下であった。	A	取得率は90.4%であった。 今年は新しく保育検定造形表現順1級も挑戦できた。		検定動画の視聴やタブレット作品を撮影しての振り返りをした。保育準1級は今年度初めて受験させることができた。
		情報化社会に主体的に参画できるよう、パソコン・タブレット端末の基礎技能習得を支援する。(情報科)	生徒の80%以上がパソコン・タブレット端末の基本操作を習得している。 生徒の70%以上がパソコン・タブレット端末の基本操作を習得している。 生徒の60%以上がパソコン・タブレット端末の基本操作を習得している。 生徒の60%未満がパソコン・タブレット端末の基本操作を習得している。	A	85%以上の生徒が基本操作を習得している。		基本操作についてはほとんどの生徒が習得できており、スムーズに課題をこなせる。

【令和7年度 徳島県立鳴門渦潮高等学校 学力向上実行プラン】

重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み(担当科)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画の実施状況	総合評価	所見
4 学習指導の充実	③生徒の学習意欲を引き出す指導体制・指導方法の工夫・改善を図るとともに、生徒一人一台端末を整備し、運用を円滑に進める学習活動の充実を図る。	ICTを活用し、生徒の学習意欲を高める。また、グループワークを適宜取り入れ、課題解決に向けてのコミュニケーション能力の育成につなげる。(国語科)	年間3回以上のICT機器の利用がされており、集中して授業に取り組めたと感じた生徒が90%以上であった。 年間2回以上のICT機器の利用がされており、集中して授業に取り組めたと感じた生徒が80%以上であった。 年間1回以上のICT機器の利用がされており、集中して授業に取り組めたと感じた生徒が70%以上であった。 年間0回以上のICT機器の利用がされており、集中して授業に取り組めたと感じた生徒が90%以上であった。	A	タブレット等を使って行う活動が昨年より増えた。	A	タブレットや電子黒板を用いて小説の舞台や、登場人物の行動範囲などをリアルに体感する授業が持てた。
		問題集などの補助教材も適宜使用し、生徒の学習意欲向上につなげる。ICT活用や生徒の理解度に応じた問題演習を通して、生徒自らが考え解決する態度を養う。(数学科)	生徒の80%以上が授業が楽しく、目標達成に向け前向きに取り組めたと感じている。 生徒の70%以上が授業が楽しく、目標達成に向け前向きに取り組めたと感じている。 生徒の60%以上が授業が楽しく、目標達成に向け前向きに取り組めたと感じている。 生徒の60%未満が授業が楽しく、目標達成に向け前向きに取り組めたと感じている。	A	生徒が意欲的に取り組めるようなプリントやICT教材の使用で、目標を達成できた。		ICT教材や様々な工夫がなされた教材が多数あるので、教員独自の教材とともに活用していきたい。
		視聴覚教材や新聞などを教材として利用し、有用と実感できている生徒を増やす。(地歴公民科)	年間3回以上のICT機器の利用および工夫がされていると実感できる生徒が90%以上であった。 年間2回以上のICT機器の利用および工夫がされていると実感できる生徒が80%以上であった。 年間1回以上のICT機器の利用および工夫がされていると実感できる生徒が70%以上であった。 年間0回以上のICT機器の利用および工夫がされていると実感できる生徒が70%未満であった。	A	生徒が意欲的に取り組めるようなプリントやICT教材の使用で、目標を達成できた。		さまざまなICT教材を適材適所で生徒の理解を深めるために使用する。また、教員独自の教材をさらに開発する。
		ICT技術の活用や観察・実験を通して、生徒の興味関心の向上を図る(理科)	80%以上の生徒が、以前より興味関心を持てるようになったと感じている。 70%以上の生徒が、以前より興味関心を持てるようになったと感じている。 60%以上の生徒が、以前より興味関心を持てるようになったと感じている。 60%未満の生徒が、以前より興味関心を持てるようになったと感じている。	A	実際の実験だけでなく、授業で行えない演習実験などを映像で見せることで、目標を達成することができた。		ICT機器の活用を通して、限られた時間の中で効果的かつ効率的に授業を進めることができた。
		ICT活用や共通ワークシートを使用し学習意欲の向上を図る。活動中心の授業を行い、表現能力を養う。(英語科)	教材や指導が工夫されており、集中して授業に取り組めたと感じた生徒が90%以上であった。 教材や指導が工夫されており、集中して授業に取り組めたと感じた生徒が80%以上であった。 教材や指導が工夫されており、集中して授業に取り組めたと感じた生徒が70%以上であった。 教材や指導が工夫されており、集中して授業に取り組めたと感じた生徒が70%未満であった。	A	すべての科目でタブレットによる表現活動を取り入れた。		動画などでオーセンティックな教材を取り入れ生徒の興味関心を引くことができた。
		体づくり運動や楽しく運動することを学び、基礎体力の向上を図る。(保健体育)	新体カテストのA・B評価の生徒の割合が10%向上した。 新体カテストのA・B評価の生徒の割合が5%向上した。 新体カテストのA・B評価の生徒の割合が昨年度と同率であった。 新体カテストのA・B評価の生徒の割合が減少した。	A	多くの生徒の評価が10%程度向上した。		新型コロナウイルス感染症が第5類感染症となり、運動機会が増えた生徒が多くなったように感じた。
		ICT技術を活用した学習に取り組む、自己実現につながる学習意欲の向上を目指す。(商業科)	生徒の80%以上がICT技術を利用した学習を行い、目標達成に向け前向きに取り組めたと感じている。 生徒の60%以上がICT技術を利用した学習を行い、目標達成に向け前向きに取り組めたと感じている。 生徒の40%以上がICT技術を利用した学習を行い、目標達成に向け前向きに取り組めたと感じている。 生徒の40%未満がICT技術を利用した学習を行い、目標達成に向け前向きに取り組めたと感じている。	A	自主的な学習活動(特に資格取得)への意欲が見られた。		進路に応じた取組を考えることができています。
		ICTを活用した実習によって、目標をもって取り組む態度を養う。(工業科)	生徒の80%以上が、目標をもって前向きに取り組めたと感じている。 生徒の70%以上が、目標をもって前向きに取り組めたと感じている。 生徒の50%以上が、目標をもって前向きに取り組めたと感じている。 生徒の50%未満が、目標をもって前向きに取り組めたと感じている。	A	94.2%の生徒が前向きな取組ができたとして自己評価している。		工業の履修に関し26.5%の生徒が「とても満足」と回答していた。将来活かせる技能が習得できるため、高い意欲と満足感に繋がっていると思われる。
		授業で学習した内容を生かし、各家庭における課題解決に向けての取り組みの研究(ホームプロジェクト・レポート)の提出90%以上を目指す。(家庭科)	ホームプロジェクト・レポートの提出率が90%以上であった。 ホームプロジェクト・レポートの提出率が70%以上90%未満であった。 ホームプロジェクト・レポートの提出率が50%以上70%未満であった。 ホームプロジェクト・レポートの提出率が50%以下であった。	A	提出率は98.8%であった。生徒が取り組みやすいように事前に資料を配付した。		家庭の状況にも差があるためか、取り組みにくい生徒が一部いたが、全体的によく取り組んでいた。
		ICTを適宜活用し学習意欲の向上を目指し、実習に生かすことができる思考力・判断力・表現力を養う。(福祉・看護科)	生徒の80%以上が授業が楽しく、前向きに取り組めたと感じている。 生徒の70%以上が授業が楽しく、前向きに取り組めたと感じている。 生徒の50%以上が授業が楽しく、前向きに取り組めたと感じている。 生徒の50%未満が授業が楽しく、前向きに取り組めたと感じている。	A	ICTを調べ学習や確認テストで活用し、楽しく前向きに取り組むことができた。		楽しく前向きに取り組んでいたが、効果について考えていく必要がある。
タブレット端末や共用PCを活用し、生徒の学習意欲の向上につなげ、課題について自ら解決しようとする態度を養う。(情報科)	生徒の80%以上が授業が楽しく、前向きに取り組めたと感じている。 生徒の70%以上が授業が楽しく、前向きに取り組めたと感じている。 生徒の50%以上が授業が楽しく、前向きに取り組めたと感じている。 生徒の50%未満が授業が楽しく、前向きに取り組めたと感じている。	A	全体的に授業に前向きに取り組んでいる。	ICT機器の利用によって、より生徒の興味関心を引くことが出来ている。			
毎時間生徒の実態に即した目標を明確にし、ICTも活用して、生徒自らが思考力・判断力・表現力を身につけようとする態度を養う。(芸術科)	生徒80%以上が授業に意欲的に取り組み、目標達成に向け努力することができたと感じている。 生徒70%以上が授業に意欲的に取り組み、目標達成に向け努力することができたと感じている。 生徒60%以上が授業に意欲的に取り組み、目標達成に向け努力することができたと感じている。 生徒50%以上が授業に意欲的に取り組み、目標達成に向け努力することができたと感じている。	A	80%を超すほとんどの生徒が制作・練習に積極的に取り組み、授業に意欲的に参加できた。	上手に発表したい、納得がいくように仕上げたいという高い意識を持ってよく練習する姿が多く見られた。			

重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み(担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画の実施状況	総合評価	所見	次年度への課題 今後の改善方針
5 進路指導の徹底	①生徒一人ひとりの学力や適性などを的確に把握し、個に応じたきめ細やかな指導を徹底する。	①面談を通じて生徒の学力・適性・個性を把握する。 (進路指導)	面談を活用し、十分な生徒理解と、進路に対するアドバイスができた。 面談を活用し、おおむね生徒理解ができた。 面談を実施したが、満足していく生徒理解ができなかった。 面談を実施できなかった。	A	よくできた40.0%、できた46.7%と合わせて80%以上の正担任ができたという実感を持っている。	A	進路指導において面談は大きな役割を果たしているようである。情報共有については、会議よりもむしろ職員室での声かけや回覧等が効果的であると考えた。	担任や部活動顧問とのさらなる連携。難易度を含めた県内進学先一覧表を作成し、担任と生徒間で意識差が生じにくくする。
		②進路対策会議を実施する。 (進路指導)	必要な情報を共有し、進路指導に十分活用することができた。 必要な情報を共有することはできたが、十分活用することができなかった。 必要と感じる情報を共有することができなかった。 進路対策会議を実施しなかった。	A	大変役に立った34.2%、役に立った50.0%と80%以上の教員が有効活用した。			
		③生徒一人一人の進路実現に向けての支援体制を拡充する。 (進路指導)	支援体制について生徒の80%以上が満足した。 支援体制について生徒の70%以上が満足した。 支援体制について生徒の50%以上が満足した。 支援体制について生徒の50%未満しか満足しなかった。	A	「学校や先生は、進路実現のために支援をしてくれているか」の問いに、そう思う66.1%、少しはそう思う28.1%と回答している。			
	②課題研究やガイダンスなどスポーツ科学科・総合学科の特性を考慮したキャリア教育を推進する。	①表現力養成講座や就職・進学のための進路別学習・面接指導を行い、事前事後の指導を充実させる。 (企画)	参加生徒の80%以上が満足した。 参加生徒の70%以上が満足した。 参加生徒の50%以上が満足した。 参加生徒の50%未満しか満足しなかった。	A	2年次の総合的な探究の時間において今後活かせるが42.4%、活かせるが48.8%で合計91.2%であった。	B	①自己推薦文を作成することにより、自己の在り方・生き方を考えた。さらに、今年度は13名の生徒がインターシップを行った。 ②「産社」「総探」の授業においては「鳴門に学ぶ」「職業人に学ぶ」「地域の社長に学ぶ」「消費者教育」等の講演が多い。生徒の満足度が「普通」が多く、満足度をもう少し上げる必要がある。 ③「課題研究発表会」において、1、2年次の事後アンケートでは「知識が増えた。」「プレゼンテーション能力が高い」等の感想があり、次年度への参考になっていた。	③課題研究発表会において、次年度プレゼンテーション能力に加え、考察を深めることができるよう指導していく。
		②1年次総合学科における「産社」、2年次・3年次の「総探」「総学」の内容を充実させる。 (企画)	生徒の80%以上が「産社」・「総探」の授業に満足した。 生徒の70%以上が「産社」・「総探」の授業に満足した。 生徒の50%以上が「産社」・「総探」授業に満足した。 生徒の50%未満しか「産社」・「総探」授業に満足しなかった。	C	大変満足した28.3%、満足した34.3%と62.6%以上の生徒が満足したと回答している。また普通が19.0%であった。			
		③総学の「課題研究発表会」を充実させる。 (企画)	生徒の80%以上が発表会に満足した。 生徒の70%以上が発表会に満足した。 生徒の50%以上が発表会に満足した。 生徒の50%未満しか発表会に満足しなかった。	A	3年次の課題研究の取り組みは92.6%の生徒がよく取り組んでいると回答している。97.1%の生徒が発表会に満足している。			
		④スポーツ科学科の進路に対して大学等を含め情報提供に努める。 (進路指導)	進路情報の提供について、スポーツ科学科生徒の80%以上が満足した。 進路情報の提供について、スポーツ科学科生徒の70%以上が満足した。 進路情報の提供について、スポーツ科学科生徒の50%以上が満足した。 進路情報の提供について、スポーツ科学科生徒の50%未満しか満足しなかった。	A	大変満足した52.5%、満足した42.6%と95%以上の生徒が満足したと回答している。			
	③進路設計や進路選択に必要な情報提供を組織的・計画的に行い、生徒一人ひとりの勤労観・職業観の育成を図る。	①進路講演会、講話、ホームルーム活動を通じて生徒の職業観・勤労観に努める。 (進路指導)	進路情報の提供について、生徒の80%以上が満足した。 進路情報の提供について、生徒の70%以上が満足した。 進路情報の提供について、生徒の50%以上が満足した。 進路情報の提供について、生徒の50%未満しか満足しなかった。	A	「進路ガイダンス」について、役立った52.3%、少し役立った39.6%と回答している。	A	8割以上の生徒が満足しており、継続的に実施したい。	進路講演会の内容充実。「進路のしおり」の内容精選。出張授業や体験授業のさらなる開催。
		②ホームルーム活動を含め、「進路のしおり」を活用する。 (進路指導)	「進路のしおり」を利用した生徒が80%以上であった。 「進路のしおり」を利用した生徒が70%以上であった。 「進路のしおり」を利用した生徒が50%以上であった。 「進路のしおり」を利用した生徒が50%未満であった。	A	よく活用した57.6%、少し活用した29.1%と活用した生徒が80%以上であった。			

重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み(担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画の実施状況	総合評価	所見	次年度への課題 今後の改善方針
6 人権教育推進	①各教科・科目・ホームルーム活動・「産業社会と人間」「総合的な学習の時間」等全ての教育活動に人権尊重の理念を定着させる。 (人権教育)	①各教科・科目・ホームルーム活動・「産業社会と人間」「総合的な学習の時間」等全ての教育活動に人権尊重の理念を定着させる。 (人権教育)	各教科の人権教育の学習評価で、「大変満足した」「満足している」の合計が80%以上であった。 各教科の人権教育の学習評価で、「大変満足した」「満足している」の合計が70%以上であった。 各教科の人権教育の学習評価で、「大変満足した」「満足している」の合計が50%以上であった。 各教科の人権教育の学習評価で、「大変満足した」「満足している」の合計が40%以上であった。	A	総合学科の「産業社会と人間」における外部講師を招いての人権学習の視点を取り入れた授業展開、及び人権の視点を交えた撫養街道ウォークの実施など、生徒の評判と大変良好であった。	A	総合学科の「産業社会と人間」における外部講師を招いての人権学習の視点を取り入れた授業展開、及び人権の視点を交えた撫養街道ウォークの実施など、また、人権映画会では人間の尊さが十分伝わったのではないかと。 夏期休業中の課題にしている人権意見作文はほとんどの生徒が提出できた。そして、それを校内人権意見発表会につなげているが、発表者の人権問題に対する真摯な気持ちが聴取者に伝わり、人権意識の向上につながることができた。 また、月に一回の「人権を考える日」の実施(学期に一回と生徒の放送)を通して、学校全体に人権意識の向上が図られたのではないかと考える。	生徒が自らの課題として人権問題をとらえ、主体的に取り組もうとする指導計画の充実をめざす。いじめなどの身近な差別事象に対して、対応できる態度を育てる。
		②人権学習ホームルーム活動を柱として、人権や命の大切さを根底に捉えた人権教育や道德教育を推進する。 (人権教育)	人権学習ホームルーム活動に「大変満足した」「満足している」生徒が70%以上であった。 人権学習ホームルーム活動に「大変満足した」「満足している」生徒が60%以上であった。 人権学習ホームルーム活動に「大変満足した」「満足している」生徒が50%以上であった。 人権学習ホームルーム活動に「大変満足した」「満足している」生徒が40%以上であった。	A	生徒の主体性を重視した人権ホームルーム活動を目指し、また月に一回の「人権を考える日」の実施(学期に一回と生徒の放送)など、各担任等が指導計画の工夫に努めたことにより、生徒の評価は良好な結果が得られた。満足度93.4%			
		③人権意見作文や研修・講演会等の感想を書くことで、人権意識の向上を目指す。 (人権教育)	全校生徒の90%以上が感想文を提出した。 全校生徒の80%以上が感想文を提出した。 全校生徒の70%以上が感想文を提出した。 全校生徒の60%以上が感想文を提出した。	A	人権意見作文は殆どの生徒からの提出が得られた。また、7月の人権講演会は板東俘虜収容所のビデオ鑑賞、11月の校内意見発表会では第1体育館で各クラス1名代表による人権問題意見発表会を開催、12月は人権映画会(ゴールデンカムイ)と同和かるた取り大会を実施した。満足度93.4%			
②地域や家庭と連携した人権教育を推進する。	①教職員間の人権意識向上を目指した研修会を実施する。 (人権教育)	研修後、今後の人権教育の向上に役立つと感じた教職員が80%以上であった。 研修後、今後の人権教育の向上に役立つと感じた教職員が70%以上であった。 研修後、今後の人権教育の向上に役立つと感じた教職員が60%以上であった。 研修後、今後の人権教育の向上に役立つと感じた教職員が50%以上であった。	A	教職員講演会は講師に徳島県人権教育指導員の弘瀬理沙さんをお呼びして、「同和問題障」に関する研修を行った。同和問題への関心が薄まるなか、有意義な研修ができた。「研修会が人権教育の向上に役立つ」が100%だった。	A	総合学科の「産業社会と人間」における鳴門地域の外部講師を招いての人権学習の視点を取り入れた授業展開、及び人権の視点を交えた撫養街道ウォークの実施など、地域理解を含めた人権教育の推進が大きく図られた。教職員人権HR研究授業は、全教職員が参観する本校独自の実施形態をとっているが、新たに人権HRに組み入れられた「災害と人権」で今後の人権教育の推進に大きな成果と学習が得られた。	人権教育行事(人権HR、校内意見発表会、人権を考える日など)をさらに充実させて実施していきたい。また、積極的に鳴門市人権文化祭に教職員が参加する雰囲気づくりをめざしたい。	
	②鳴門市人権文化祭や県内各種人権問題の大会や研修会に積極的に参加する。 (人権教育)	鳴人祭、各種人権大会等に参加した教職員が全体の60%以上であった。 鳴人祭、各種人権大会等に参加した教職員が全体の50%以上であった。 鳴人祭、各種人権大会等に参加した教職員が全体の40%以上であった。 鳴人祭、各種人権大会等に参加した教職員が全体の40%未満であった。	B	コロナ禍が5類に変わり、各種の人権大会や行事において、できる限り多数の教職員が参加できることをめざし、年度当初に参加計画を立て、学校行事と重なったことがあったが、ほぼ予定通り参加できた。参加率50.0%				
③自主活動の活性化に努める。	①人権委員会、人権意見発表会、校内自主活動、「中・高生による人権交流集会」等への生徒の積極的参加を促す。 (人権教育)	校内外の各種人権関係行事の生徒の参加数は、60名以上であった。 校内外の各種人権関係行事の生徒の参加数は、50名以上であった。 校内外の各種人権関係行事の生徒の参加数は、40名以上であった。 校内外の各種人権関係行事の生徒の参加数は、40名未満であった。	B	校内人権意見発表会は、1・2年次で、すべてのクラスから発表者を得ることができ、生徒の参加状況は良好であった。渦高祭人権展での活動も人権委員会10名以上参加できた。「中高生による人権交流集会」への参加人数は教職員3名、生徒3名だった。同和かるた取り大会は24名参加。合計52名	A	学校行事などの自主活動は参加者も多く、作品等も素晴らしい成果があった。人権委員会による「人権を考える日」の運営は、大きな成果を挙げた。なお、社会問題研究部は、部員の確保に課題を残した。	人権委員会の活性化をはかるとともに、社会問題研究部の部員の確保を目指したい。	

重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み(担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画の実施状況	総合評価	所見	次年度への課題 今後の改善方策
7 読書活動の推進	①生徒の自主的な読書活動を推進する。	読書感想文(夏休み課題)の提出を促す。 (図書情報)	読書感想文の提出が80%以上であった。 読書感想文の提出が70%以上であった。 読書感想文の提出が60%以上であった。 読書感想文の提出が60%未満であった。	A	100%の提出ができた。	A	提出課題としているため全員の提出ができた。	課題の提出という手段以外に、「朝の読書週間」や「読書会」などの行事の工夫と機会の拡大で、自主的な読書活動ができるようにしたい。
	②新聞を活用した学習活動を推進する。	ホームルーム活動等で、新聞を活用する。 (図書情報)	新聞を活用したホームルームが50%以上であった。 新聞を活用したホームルームが30%以上であった。 新聞を活用したホームルームが20%以上であった。 新聞を活用したホームルームが20%未満であった。	A	ホームルーム活動での活用は73.3%であった。	B	新聞をホームルーム活動で利用するに関しては、昨年78.6%から減少し、教科指導でも昨年の45.9%から減少した。	様々な学校生活のシーンで、新聞の活字が身近になるようにしたい。また図書委員による新聞切り抜きの掲示の知名度をもっと上げるように工夫したい。
		授業で新聞を活用する。 (図書情報)	新聞を活用した授業者が50%以上であった。 新聞を活用した授業者が30%以上であった。 新聞を活用した授業者が20%以上であった。 新聞を活用した授業者が20%未満であった。	B	教科指導での活用は44.4%であった。			
③学校図書館の活用を促進する。	図書館の入館者の数を増やす。(図書情報)	入館者数が前年度に比べ5%以上増えた。 入館者数が前年度に比べ増えた。 入館者数が前年度とほぼ同等だった。 入館者数が5%以上減った。	B	図書館を利用したという生徒の割合は88.7%で、昨年の86.1%から2.6%増えた。	B	図書館の利用の割合は高いが、1人あたりの貸出冊数は2.2冊(4~12月)と、あまり多くなかった。	別棟である図書館だが、多くの生徒に来てもらうようなイベントを計画し、より多くの生徒が本を借りる機会になるようにしたい。	

重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み(担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画の実施状況	総合評価	所見	次年度への課題今後の改善方策
8 開かれた学校づくりの推進	①公開授業、中学生体験入学などの教育活動の公開を推進する。	①公開授業を年間2回以上実施する。(企画)	年間2回以上実施し、前年度に比べて参加者の割合が100%以上であった。年間2回以上実施し、前年度に比べて参加者の割合が100%未満であった。年間2回以上実施し、前年度に比べて参加者の割合が80%未満であった。年間2回以上実施し、前年度に比べて参加者の割合が70%未満であった。	A	公開授業を10月と11月に2回実施した。参加者は中学生12名、保護者・地域住民等60名であり、前年度に比べ参加者の人数は増えた。	A	公開授業や文化祭を通して、保護者や中高生・地域の方に、学校の施設や雰囲気を見てもらうことができた。中学生体験入学では、スポーツ科学科と総合学科に別れての授業を行った。総合学科においては情報通信・総合ビジネス・福祉・人文・自然の系列が選択できるよう12講座を開講した。また部活動体験に参加した中学生にとっては、本校生徒と交流することで、進路決定の一助となった。	公開授業や文化祭において前年度に比べて保護者や地域の一般の方々の参加人数が増えるよう広報に努める。部活動においては個々の部活動で別日に見学や体験を実施している。部活動の顧問の先生と企画で連携をしっかりととり、さらに教育活動の公開を推進できるよう努める。
		②中学生体験入学での授業内容を充実させる。(企画)	体験授業の内容を「よい」と評価した生徒が90%以上であった。体験授業の内容を「よい」と評価した生徒が80%以上であった。体験授業の内容を「よい」と評価した生徒が70%以上であった。体験授業の内容を「よい」と評価した生徒が70%未満であった。	A	中学生体験入学を7月の夏期休業中に実施した。参加者はスポーツ科に100名、総合学科に258名であり、参加中学校は56校であった。参加者の92.7%が授業の内容に「とてもよい」「よい」と評価した。			
		③学校祭を保護者や中高生・地域の方に開放する。(特別活動)	今年度訪問者数が300人以上であった。今年度訪問者数が200人以上であった。今年度訪問者数が150人以上であった。今年度訪問者数が150人未満であった。	B	今年度は文化祭において保護者のみの限定公開を実施した。訪問者は150人未満であった。			
8 開かれた学校づくりの推進	②ホームページ等を利用して迅速な情報発信をする。	メール配信システムなどICT活用を推進する。(図書情報)	ICTを活用した連絡方法は便利だと感じている生徒が80%以上であった。ICTを活用した連絡方法は便利だと感じている生徒が60%以上であった。ICTを活用した連絡方法は便利だと感じている生徒が40%以上であった。ICTを活用した連絡方法は便利だと感じている生徒が40%未満であった。	A	93.6%の生徒が、便利(ふつう含)と回答している。	A	本校ホームページのアクセスは保護者のうち73.9%が見ていると回答している。電子黒板やタブレットによる授業は78.2%の生徒がわかりやすいと回答しており、学校生活や学習活動のいずれでも、本校のICT機器の利活用が充実してきたと思われる。	本校ホームページのアクセスは、本校への進学を考えている中学生やその関係者も多くいるため、スポーツ科学科や総合学科の特徴、総合学科の5つの系列の学校生活をより知ってもらえるように充実させたい。
		ホームページの内容を適宜更新し、充実を図る。(図書情報)	ホームページアクセス数が月平均10000件以上であった。ホームページアクセス数が月平均5000件以上であった。ホームページアクセス数が月平均3000件以上であった。ホームページアクセス数が月平均3000件未満であった。	A	毎月10000件以上のアクセスがあった。			
8 開かれた学校づくりの推進	③地域・PTA・同窓会等との情報の共有や連携を円滑にするシステムを構築するとともに、地域の人材の活用を推進する。	①PTA総会の参加者増を図る。(総務)	参加者が150名以上であった。参加者が100名以上であった。参加者が50名以上であった。参加者が50名未満であった。	B	PTA総会は5月10日(土)に開催し、本年度の参加者数は120名であった。	A	PTA総会は、決算・行事報告および予算(案)・行事計画(案)とともに、賛成多数で無事に承認・可決された。PTA研修は、鳴門教育大学から講師をお迎えしエシカル調理実習を行った。	PTA総会を含む各種活動は、学校と家庭(保護者)をつなぐ存在であることから、今後も機会があるごとに密接に連携していきたい。
		②PTA研修の充実を図る。(総務)	参加者の満足度、A・B評価が80%以上であった。参加者の満足度、A・B評価が50%以上であった。参加者の満足度、A・B評価が30%以上であった。参加者の満足度、A・B評価が30%未満であった。	A	PTA研修会には3名のご参加をいただいた。保護者の方には普段の授業へ加わっていただく形を取ったことで、子どもたちの学校での様子がよくわかると好評であった。			

重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み(担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画の実施状況	総合評価	所見	次年度への課題 今後の改善方針
9 グローバル教育	①郷土の伝統・文化について理解を深める教育を推進する。	①「産業社会と人間」を通して徳島県や鳴門市の自然・歴史・文化・産業の素晴らしさを認識させる。 (総合学科)	郷土の自然・歴史・文化・産業を誇りに思える生徒が70%以上であった。 郷土の自然・歴史・文化・産業を誇りに思える生徒が60%以上であった。 郷土の自然・歴史・文化・産業を誇りに思える生徒が50%以上であった。 郷土の自然・歴史・文化・産業を誇りに思える生徒が50%未満であった。	A	1年次生に撫養街道ウォーク、1.2年次に鳴門に学ぶ地域学講座を実施し、鳴門に対する学習と理解を教職員とともに深めた。その学習は産業社会と人間のプレゼンに反映された。地域への貢献の一環として、地域審査員制を導入した。誇りに思える生徒は72.1%。	A	・さまざまな機会を通じて鳴門に関する学習をすることができた。また、地域と連携してインターンシップを本年度も希望制ではあるが、実施することができた。	・持続可能な事業の継続、撫養街道ウォークの別コースを作る。 ・課題研究発表会を公開とし、地域外部審査員制を入れる。
		②インターンシップや「総学」の時間を通じ、地元へ根付き、貢献している産業・文化・歴史についての理解を深めさせる。 (総合学科)	地元の産業・企業の活躍を誇りに思える生徒が70%以上であった。 地元の産業・企業の活躍を誇りに思える生徒が60%以上であった。 地元の産業・企業の活躍を誇りに思える生徒が50%以上であった。 地元の産業・企業の活躍を誇りに思える生徒が50%未満であった。	A	2年次におけるインターンシップは生徒の希望制で実施した。課題研究発表会で、インターンシップの発表会ができた。多くの生徒が地元企業のことを知る機会となるとともに、自身の進路を考えるきっかけとなった。	A		
	②異文化理解学習を通じて共生の精神の涵養を図る。	①授業等の教育活動を通して、海外の習慣や文化に触れ、日本の文化との共通点や相違点についての理解を深めさせる。 (国際交流)	世界には多様な文化があることを理解した生徒が70%以上であった。 世界には多様な文化があることを理解した生徒が60%以上であった。 世界には多様な文化があることを理解した生徒が50%以上であった。 世界には多様な文化があることを理解した生徒が50%未満であった。	A	特に講演活動等は実施しなかったが、80%以上の生徒が海外の習慣や文化に触れ、日本文化との共通点や相違点について理解できたと回答した。普段の授業や単発的ではあるがドイツ人留学生との交流を通して、その理解を深めている。	A	ドイツからの留学生をホームステイで受け入れた生徒がおり、共に学校生活を送った。短期間であったが、他の生徒たちも積極的に声をかけるなど、交流を図ろうと様子が多く見られた。1月には7名の生徒が台湾にある姉妹校を訪問し、英語および中国語による交流活動を実施した。異文化に触れると同時に、日本文化に関するプレゼンテーションや阿波踊りを披露し、国際理解の深化を図った。	来年度は、台湾の姉妹校が本校を二日間訪問する予定である。また、鳴門市が姉妹都市交流を行っているドイツ・リュネブルク市を訪問する年でもある。鳴門市在住の生徒に限られるが、希望する生徒がいることを期待している。授業やスポーツ、文化活動を通して、有意義な交流ができればと考えている。台湾姉妹校との交流については、円滑な相互交流を今後も継続していきたいが、予算面での課題がある。
③スポーツ等を通じた国際交流を推進する。	③ALTの先生などとの交流を通して、異文化を尊重し、自国の文化を誇りに思い、共生していく姿勢を培う。 (国際交流)	異文化尊重と共生の精神について理解した生徒が70%以上であった。 異文化尊重と共生の精神について理解した生徒が60%以上であった。 異文化尊重と共生の精神について理解した生徒が50%以上であった。 異文化尊重と共生の精神について理解した生徒が50%未満であった。	A	米国出身のALTの授業を通じて、異国の文化や習慣を体感することにより異文化尊重・共生の精神を培う機会をすべての学年を対象(80%以上相当)に確保した。	A			
		①競技を通して海外の学生と交流する機会を設ける。 (スポーツ科学科)	国際大会や交流会等に参加する機会を設け、競技を通じた国際交流に積極的に取り組んだ。 国際大会や交流会等に参加する機会を設けたが、競技を通じた国際交流に取り組めなかった。 国際大会や交流会等に参加する機会を設けられなかった。	B	柔道部員が部活動等の競技を通しての交流経験の機会を得ることができた。	A	台湾訪問で阿波踊り体験交流や競技ごとの部活動を通しての交流があった。特に競技の特性から柔道競技等は交流する機会が多かった。	姉妹校との交流を始め、競技ごとの交流も積極的に行えるようHPでの情報発信を含め広く広報に務めたい。

重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み(担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画の実施状況	総合評価	所見	次年度への課題 今後の改善方策
10 学校運営体制の充実	①教職員のコンプライアンス意識の高揚を図る。	①学校活動の様々な機会をとらえて、効果的な研修の機会を設ける。	年間を通じて8回以上研修の機会を設けた。 年間を通して6回以上研修の機会を設けた。 年間を通して5回以上研修の機会を設けた。 年間を通して研修の機会が5回未満にとどまった。	A	「夏・冬のコンプライアンス推進週間」に研修を実施するとともに、職員朝礼での適時の注意喚起やJoruri 回覧板を活用した研修を、年間8回以上実施することができた。	A	日常的・定期的な研修の実施に加え、Joruri 回覧板を用いた情報発信の機会を設けたことで、職員のコンプライアンスへの理解が深まった。	職員のコンプライアンス意識をさらに高めるため、外部講師の招聘など、多様な視点を取り入れた研修を実施し、研修内容の充実を図っていく。
		②研修の内容を精選し、受講する教職員の理解度を高める。	全教職員の90%以上が理解度が高まったと考えている。 全教職員の80%以上が理解度が高まったと考えている。 全教職員の70%以上が理解度が高まったと考えている。 理解度が高まったと考える教職員が70%未満にとどまっている。	A	研修の結果、「コンプライアンスへの理解が深まった」と回答した職員は94.7%であった。			
	②危機管理態勢の徹底を図る。	①安全教育・防災教育をはじめ危機管理に関する理解を深め、危機を予測し対応できる能力と体制を整える。	全教職員の85%以上が、安全教育・防災教育の知識・技術を身につけている。 全教職員の75%以上が、安全教育・防災教育の知識・技術を身につけている。 全教職員の65%以上が、安全教育・防災教育の知識・技術を身につけている。 安全教育・防災教育の知識・技術を身につけていると考えている職員が、全体の65%未満にとどまった。	A	安全教育・防災等の知識・技術について習得できた職員が97.4%であった。 また、防災体制が確立されていると思う職員は97.4%であった。	A	危機管理の観点から、生徒の安全確保に必要な心の健康や、防災に関する研修を実施し、必要な知識や技術を習得することができた。	研修については内容を随時更新しながら実施し、防災や生徒の安全確保など、危機管理能力の一層の向上を図る必要がある。また、教職員が働きがいを感じ、働きやすい職場となるよう、業務の棚卸しや良好な職場環境づくりを進め、「風通しの良い職場」を推進する。
		②教職員間の日頃のコミュニケーションを密にするとともに、「風通しの良い職場環境作り」に配慮し、創造的な意見を出しやすい環境を整える。	全教職員の60%以上が、職場環境によるストレスを感じていない。 全教職員の55%以上が、職場環境によるストレスを感じていない。 全教職員の50%以上が、職場環境によるストレスを感じていない。 職場環境によるストレスがないと感じる教職員が全体の50%未満にとどまった。	A	学校評価アンケートにおいて、項目「学校の組織は、「風通しの良い職場」だと思いますか。」で「そう思う・ややそう思う」が78.9%であった。			
	③学校価値の創造を推進する新規事業の創出、地域の人材づくり、国際交流等、新しい企画を推進するとともに、課題解決に向けた協働体制を確立する。	①地域に貢献できる人材の育成を期待できる事業創出する。(NEXT)	地域の事業に生徒が参加協力し、全体として共に運営する機会を造った。 地域の事業に生徒が参加協力する機会を造った。 生徒に地域の事業に関する広報を行った。 地域の事業に関する協力の依頼があった。	A	鳴門市の「インナープロポーション推進事業」、「市議会だより」編集など様々な行事等に参加した。また鳴門市の運営する地域の運動会にも有志が参加し、運営の補助などを通じて地域に貢献した。どちらも依頼を受けての参加。	A	地域の事業への参画については、積極的に実施することができた。また、鳴門市との連携により、新たな取組の実施にも積極的に取り組んだ。	地域への広報を積極的に行い、地域と連携した取組を学校から発信していく。
		②各校務分掌の課長を中心に、本校の教育目標を理解し、その達成に向けた運営を行う。	全職員の70%以上が教育目標の達成を意識した改善・充実が図られていると考えている。 全職員の60%以上が教育目標を意識した改善・充実が図られているが、一部不十分な点があると考えている。 全職員の50%以上が不十分な点もあるが、一部で教育目標を意識した改善・充実が図られていると考えている。	A	課長を中心に教育目標の達成を意識した改善・充実が図られているとする職員と、図られているが、一部不十分な点があるとする職員を併せると89.4%であった。			
		③教職員が「地域に開かれた学校づくり」を意識した協働体制を図る。	協働体制による活動が円滑に実施された。 おおむね円滑に実施できたが、一部に不十分な点のみ見られた。 不十分な点も多々あったが、効果的な部分のみ見られた。	A	協働体制による活動が円滑に実施された、おおむね円滑に実施できたとする職員が併せて84.2%であった。効果的な部分もあったとする教員を合わせると94.7%であった。			

重点課題	重点目標	目標達成に向けた取り組み(担当課)	評価の観点	評価	評価指標の達成度と活動計画の実施状況	総合評価	所見	次年度への課題今後の改善方針
11 食育の推進	①食育に対する知識と理解を深め、健康増進を図る。	①自身の食生活を振り返ることにより、日頃の栄養バランスを意識して食生活を送ることができる。(食育コーディネーター)	生徒の80%以上が栄養バランスを意識した食生活を送ることができる。 生徒の70%以上が栄養バランスを意識した食生活を送ることができる。 生徒の60%以上が栄養バランスを意識した食生活を送ることができる。 生徒の60%未満が栄養バランスを意識した食生活を送ることができる。	B	73.3%の生徒が栄養バランスを意識して食生活をおくることができる。とアンケートにおいて回答している。	B	多くの生徒が食生活を意識して生活を送ることができる。一方、高校生活においてアルバイトや情報通信機器の使用などから生活リズムが乱れ、食生活にも影響している生徒もいると考えられる。	小中学校の頃から食育を受け、食に関する意識は高くあるが、一方で毎日の食生活に反映することができていない生徒がいるという現状を踏まえ、生活リズムの改善も含め指導をしていく必要がある。
		②料理コンテストに応募することにより、食に興味・関心をもつ。(食育コーディネーター)	家庭科の授業において生徒の90%以上が料理コンテストに応募した。 家庭科の授業において生徒の80%以上が料理コンテストに応募した。 家庭科の授業において生徒の70%以上が料理コンテストに応募した。 家庭科の授業において生徒の70%未満が料理コンテストに応募した。	B	家庭科の授業での課題として、料理コンテストに85.3%の生徒が応募した。			
	②食育を通じて競技力の向上を図る。	①スポーツ栄養学について、競技に応じて管理栄養士の専門的な指導を受ける。(食育コーディネーター、スポーツ科学科)	生徒の70%以上が競技に応じて専門的な栄養指導を受けた。 生徒の60%以上が競技に応じて専門的な栄養指導を受けた。 生徒の50%以上が競技に応じて専門的な栄養指導を受けた。 生徒の50%未満が競技に応じて専門的な栄養指導を受けた。	C	スポーツ科学科において、専攻実技ごとに分かれて約50%の生徒が競技に応じた専門的な栄養指導を受けた。	B	今年度は栄養指導の機会が十分得られなかった。しかし、競技力向上のために食事が大切な要素の一つであることを授業や講演、スポーツ科学科の課題研究発表会などで学習できている。補食についても高い意識を持っている。	競技力向上に向けて、食事・睡眠・休養をどのように自己管理していくか、実践に向けて各担当の教員と連携して指導していく必要がある。
		②競技力の向上のために補食を意識し、間食に気を付けることができる。(食育コーディネーター、スポーツ科学科)	生徒の60%以上が補食を意識し、間食に気を付けている。 生徒の50%以上が補食を意識し、間食に気を付けている。 生徒の40%以上が補食を意識し、間食に気を付けている。 生徒の40%未満が補食を意識し、間食に気を付けている。	A	スポーツ科学科において、77.7%の生徒が間食の際に補食を意識することができていると答えている。			